

卷之三

る議論が行はるゝ
もの等は一笑に附
し去るべきものなり
高麗相ば別列の答辯につき
補足する所あり

農相に會見

甲子

△長官と打合せ
○上でごろみに受流す
職所職工罷業事件に關する
の鈴木文治氏外二名曰
の工藤勇蔵氏外二名及

會見し、能業當時の模様、職工の生々状態を述べたそに對し、職相は「製鐵所の事は一切、白」長官に一任してあるのから自分は今こそ、で長官を差し工確答は出來ぬ報告も來て居るが、長官は鐵より次第再び上する事になつて居るので、いづれ會の上で充分

等の諸氏は此般相の言葉に基き近く上京する由に長官を東京で待ち受け更に立つた交渉を行ふ豫定であるが若し長官の上京が遅れるやうだつたら一應八幡に引上げて長官に會見する由

たを御観さんこそは外國貿易を禁止せざるべからずと幾々明白せられたり然て之も外國に居るを如何に解決するや商品の昂騰し居るを十分希望すと稍しあながら通貨の膨脹に對して何等の手段を講じて貿易禁正を云々して人を威嚇しあつて此問題は國庫に明瞭なる答辯をなほしたる者相は又日銀金利引上に反対なりと明言されたり然れども金利の引上亦通貨收縮の一手段なりとさば此問題に限り断乎として反対を聲明する理由何にて物價調節を目的とせず市場の需要が何ためなりと説明せり市場を整えさせとは何を意味するか市場の需

四億以上の入超を見るやう計り難し、我最大の得意たる米國の現状は如何、生糸の如きが出来て今後よく今日の好況を持續すべきや多大の疑問なり、支那の状態亦邦貨排斥尙苟まず、彼はこれを考察するに、蓋し我國の經濟界は將に反動期に入らんとする。帝相の所見如何、高橋、盛相に一矢を綴ひ、次て政策に就き、是相に質問すべしと論録を一轉し。

三問痛烈

大勢に逆行するもの。

大勢に逆行するもの

白仁長官の回答は不得要領

開口一番説

白仁長官の

既記の如く勞友會應援の爲め來幡中なる東京毎日記者加藤氏は去る十三日製鐵所白仁長官に會見を求めるに長官は快く之を諾し同日製鐵所に於て第一回會見を遂げ大要左の意味の談話を行換せしと云ふ此日白仁長官は頗る温軟を以て加藤氏に接し少しも城府を設けざるしさの事なるが加藤氏は開口一番述べて曰く人格を重視せす或も予は今日長官に進言せんとするは勞友會の代表資格にあらざり勿論新聞記者の立場からもあらず單に一個人として公正の見地に立ち誠意を披瀝して以て

豫算は秘密を固持して語らず加藤勘十氏白仁長官を突込む

は不得要領

委員會